

上野学園短期大学
研究紀要
第4号

COLLECTED PAPERS
OF UENO GAKUEN JUNIOR COLLEGE
No. 4

2025

目 次

研究ノート

能の鑑賞における感受の言語化

—幽玄の感受—

内田 有一 (1)

中学生の読書指導に関する現状と課題

—読書調査、学習指導要領、教科書紹介図書の見点から—

廣枝 優子 (11)

CONTENTS

Research Notes

Verbalizing the emotions felt when appreciating Noh:

Feeling about YUGEN

Yuichi Uchida (1)

The Current Situation and Issues in Reading Instruction for Junior High School Students:

From the Perspectives of Reading Surveys, the Course of Study, and Textbook-Recommended Books

Yuko Hiroeda (11)

能の鑑賞における感受の言語化

—幽玄の感受—

Verbalizing the emotions felt when appreciating Noh:

Feeling about YUGEN

内田 有一

Yuichi Uchida

キーワード：感受、幽玄、能、言語化

1. 研究のねらい

音楽鑑賞においては、音楽の構造を知覚することで曲想を感受するとされている。曲想の感受とは、音楽の表す感情的性格を知覚することをいう。本研究は日本の伝統音楽において、能の美的特性とされる幽玄を取り上げ、中学生が感受においてどのような語彙を表出するかについて明らかにすることをねらいとする。研究の結果をもとに感受の言語化についての研究を展開する一歩としたい。

2. 方法

実践にあたり、批評文の書式を図1ようにした。これは国語科における論理的文章の書式であり、児童生徒が習得している言語技術を活用することができ、また評価が可能である。「なか」は、「はじめ」で述べた印象的な理由を音楽の諸要素の働きで説明するため、知識の評価となる。ゆえに「はじめ」「なか」が思考1（知覚と感受の関り）の評価となる。

「はじめ」「なか」を根拠として、作品を評価する「まとめ」が、思考2（知覚と感受の関りを基にした評価）の評価となる。

この書式では、「はじめ」において感受した箇所やことがらを印象的であると指摘できればよく、形容詞的な言語化を求めないため、容易に記述できる。「なか」において、「はじめ」で述べた印象の理由を、音楽の構造や諸要素の働き、及び舞や物語（他の芸術）の視点で分析させる。「まとめ」は「なか」を根拠に、自分なりに作品の評価をする。これらの過程において、感受したことを言語化することを指示しない。

【研究ノート】

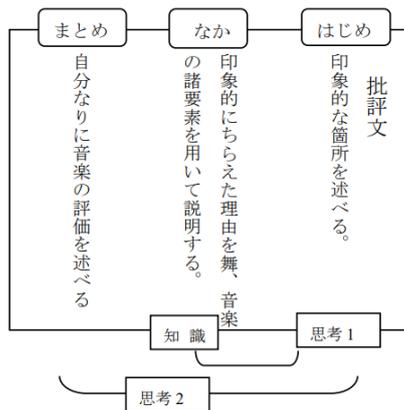


図1 批評文の書式

表1 指導計画

	学習内容	評価
1時 50分	能「敦盛」より戦語りの詞章を読み味わう。 謡を表現する。	・古典に表れたものの見方や考え 方登場人物の思いを理解する。 ・謡の特徴を生かして表現する。
2時 50分	能「敦盛」より戦語りの鑑賞をする。	曲の評価とその根拠 他の芸術との関り（舞） （美意識）

授業は2時間扱いで以下のように計画した。

第1時は、物語の理解として、詞章を朗読し文の音律を味わうとともに、古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像することが指導事項になる。謡の表現を通して、その音楽的な特徴を生かした歌唱表現を創意工夫するとともに、謡のよさに気付く。謡の学習としてシテ方観世流小早川家のサイトにおける範唱動画をを用いたタブレット型端末による個別学習を行う。

第2時は、謡の表現を通じたよさの理解を基に、能「敦盛」より戦語りを鑑賞する。鑑賞の学習としてタブレット型端末による個別学習を行う。生徒個々が印象的に捉えたところに着目させ、印象が生じる理由を音楽、舞の効果から考えさせ、能を批評する。その過程で幽玄（優美、深味のある情緒）を感じさせる箇所を見つける授業を展開する。

【研究ノート】

表2 第1時の展開

学習活動	指導の手だて及び留意点
<p>1 能「敦盛」戦語りの詞章を読む。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・能「敦盛」のあらすじを理解する。 ・詞章を音読する。 ・現代語訳を読む。 ・謡を聴く（一斉）。 <p>・謡を練習する（範唱動画を用いた個別最適化学習）</p> <p>・謡の特徴を生かし皆で歌う（一斉）。</p> <p>・謡の特徴を意見交流する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・能について説明する。 ・現代語訳を用いてあらすじを理解させる。 ・文の音律を味わい、大意は現代語訳から理解させる。 ・歌詞の言葉をひとつひとつ明確に発音する技能を範唱で提示する。 ・「～延びたもお」までを課題とし、できた人は最後まで謡うよう指示する。 ・範唱動画に合わせて歌わせる。 ・謡の特徴を意見交流させ、特徴を整理させる。
<p>評価（知識・技能・観察）</p> <p>○詞章を読み味わい、謡の特徴を生かして歌唱表現をすることができたか。</p>	

表3 第2時の展開

学習活動	指導の手だて及び留意点
<ul style="list-style-type: none"> ・「敦盛」敦盛の戦語りをタブレット型端末を用いて個別鑑賞する。：動画4分44秒 ・舞の特徴、囃子の特徴について発表する。 ・幽玄（優美、深味のある情緒）について知る。 ・個別鑑賞する。 ・自分が見つけた幽玄について発表する。 ・能「敦盛」の批評文を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・端末の動作確認をする。 ・2回鑑賞させる（10分） ・舞は優美に関する気付きが予想される。 ・幽玄とは優美（上品な美しさ、深味のある情緒）であることを伝える。 ・発問「幽玄を見つけよう」 ・優美と感じた場面を指摘できればよい。 ・はじめ、なか、まとめの構成で記述させる。 ・幽玄から書くことは指示しない。
<p>◎評価（知識、思・判・表、ワークシート）</p> <p>○音楽の特徴、舞の特徴、詞章の内容と曲想との関りを理解し、幽玄の視点からよさや美しさを味わって聴くことができたか。</p>	

能は幽玄の美を表している。幽玄は「あわれ」を受け継いだ美意識である。国語科における「あわれ」の既習経験を基に、生徒に幽玄とは「優美、しみじみとした感じ」と伝えた。能を鑑賞して幽玄と感じた根拠を、音楽の諸要素と舞の動きの視点から分析し、学級で意見交流を行う。このように感受の視点を最初から言語化して提示した。

なお批評文を書く際には、個々が印象的と感じた箇所を評価するようにした。授業では幽玄という視点で学習したが、学習者個々は、必ずしも幽玄だけを印象的にとらえるわけではないことが理由である。批評文の作成においては、学習者個々が印象的にとらえた箇所を評価することを指示し、学習者の主体性を尊重した。

3. 実践の分析

3.1. 目的

授業実践における生徒が記述した批評文において、「幽玄、優美、しみじみとした感じ」以外の感受に関する記述の出現状況を調査する。それにより、提示された「幽玄、優美、しみじみとした感じ」という語彙だけではなく、学習者が自発的に感受の言葉を表出したことを明らかにする。

【研究ノート】

調査期日 2023年2月15日

調査対象 A中学校2年生88名(男46 女子42)

教材 能「敦盛」より戦語り(世阿弥)

3.2. 分析方法

批評文の「なか」(印象の根拠を分析した個所)における音楽の諸要素に関する語彙と感情に関する語彙の出現状況について、大規模言語モデルを用いて調査する。大規模言語モデル(Large Language Models, 以降 LLM と呼ぶ)とは、Transformer を基盤に膨大な学習データで学習した言語モデルである。LLM は自然言語による指示(プロンプト)を入力することで、翻訳や固有表現抽出など様々なタスクを解くことが可能である。

本研究では、感情に関わる語彙及び音楽と他の芸術の関りに関する語彙を抽出するため、LLM(GPT-4o: gpt-4o-2024-08-06)を活用した。まず、生徒の回答文と語彙抽出の指示をプロンプトとして LLM に入力し、関連する語彙を抽出した。その後、無関係な語彙のフィルタリングを人手で行い、フィルタリング済みの語彙の出現頻度を計測した。LLM の抽出結果にはハルシネーションで生成された語彙が含まれる可能性があるため、出現頻度の計測にはルールベースな手法を適用した。

4. 結果

授業時に、生徒が記述した批評文から「なか」を示す。

生徒 A (舞や動作に着目した例)

敦盛は、静かで少しの動きの中で 様々な場面を表現していることがとても印象的だった。この印象は敦盛と直実が戦っている場面では小道具として 持っていた刀を使わずに扇子だけで表現し、敦盛が打たれる場面でも扇子を飛ばして首が飛んだように見せていたりしていたところから感じたのではないかと考えた。また、敦盛の亡霊を鎮める場面では刀を使っていたが動作がそこまで多くなく、最小限の動作で表現していたように考えたから優美だな、と感じた。他にも音の速さや強弱の変化があることでよりその話が想像しやすいものになっているのではないかと考えた。能「敦盛」の良さは、戦う場面や敵を取る場面など現実で考えると物騒な場面でも、扇子などを使ってその中から優美さを引き出しているところではないか。

【研究ノート】

生徒 B （聴覚的（音楽）、視覚的（舞）を関連させた事例）

場面の盛り上がりが印象的だった。それは囃子と場面の様子が伴って変化していくところにあると考える。

具体的に言うと、場面が盛り上がる時 には囃子の拍子が早くなったり、大きい音が重なり合ったりしている点だ。なぜそれが印象的に感じたかという と、視覚的、聴覚的に場面の様子が読み取れるからだ。また終わりの場面では笛で締めるので場面の切り替わりがよくわかり、「しみじみ」とした感覚が感じられた。さらに音の強弱がつくことによって場面が切り替わるように感じられたので視覚的（演者）で伝えられないところを音で補っているのだなと感じた。以上のことから、敦盛の能において、演者が演じる視覚的な面と囃子や謡による聴覚的な面で幽玄、また美しさを感じた。

生徒 C （音や音楽の要素に着目した事例）

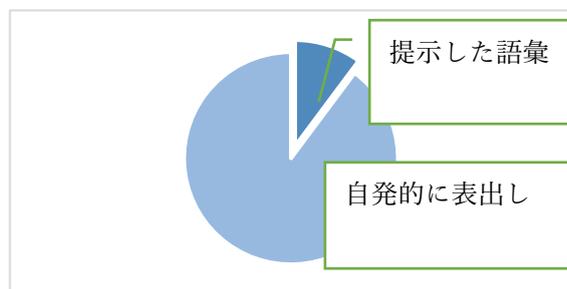
僕が「敦盛」を聞いた印象は、とてもゆったりしているということです。

このゆったりした印象はテンポと音からきていると感じました。強くたくましいような太鼓の音と、 歌声、そして早すぎずも遅すぎずもなく、とても聴いていて心地よいテンポがゆったりした印象を作 っていると感じました。また、演者さんのすり足と踏みつけるような足音や強くたたいたり、優しくたたいたりする太鼓、能の終盤で出てくる笛の音、全てが聞いている人をやさしく包み込んでくれるような音でした。

現代の音楽はポップでテンポが早く、 様々な 音色や効果音が使われていて、あまり「敦盛」のような音が単純でゆっくりストーリーが流れていく音楽を聴くことがなかったので、今回の能を聞いて、このような単純だけど曲やストーリーに深み、重みがあるという存在を知ることができました。

【研究ノート】

これらの批評の「なか」に表れた感情に関する語彙における LLM の結果を示す。



$\chi^2=219.203, p < 1.350E-49, n=345$

図2 感情に関する語彙の分類

表4 感情に関する語彙

語彙	出現頻度	語彙	出現頻度
優美	19	「優美」「しみじみ」	
しみじみ	13	「幽玄」は提示された	
幽玄	3	語彙、他は自発的語彙	
美しい	29	哀しい	2
雰囲気	15	静寂	2
心情	14	鋭い	1
上品	12	元気	1
動	10	痛い	1
力強い	10	感情移入	1
ゆったり	10	ポジティブ	1
表情	9	孤独感	1
優雅	8	臨場感	1
激しい	7	端麗	1
迫力	7	恐怖	1
キレ	7	憎しみ	1
静か	6	嬉しさ	1
盛り上がる	6	質素	1
情緒	5	心細い	1
丁寧	5	感激	1
厳か	4	哀しむ	1
落ち着く	4	安定	1
悲しい	4	やわらかい	1
静	4	おっとり	1
深い	4	静けさ	1
盛り上がり	4	儂い	1
優しい	4	気分	1
面白い	4	厚み	1
品	3	可哀想	1
明るい	3	感動	1
きれいな	3	にぎやか	1
驚く	3	テンション	1
心地よい	3	豪華	1
盛り上げる	3	辛い	1
繊細	3	嘆き悲しむ	1
緊迫	3	しとやか	1
無念	2	荒れる	1
華やか	2	はかない	1
滑らか	2	勢い	1
はっきり	2	機微	1
暗い	2	意味深	1
寂しい	2	落ち着き	1
悲しみ	2	オーラ	1
やさしい	2	びっくり	1
恐ろしい	2	勇敢	1
現実味	2	焦らせる	1
しなやか	2	厳粛	1
シンプル	2	荒い	1
洗練	2	しみ込む	1
なめらか	2	震える	1
不思議	2	渋い	1
余韻	2	興奮	1
大胆	2	躍動	1
インパクト	2	高鳴り	1
楽しい	2	孤独	1
後悔	2	高ぶり	1

【研究ノート】

次に「なか」における音楽の要素、謡、囃子、舞に関する語彙の表出頻度を示す。

表5 音楽の要素、囃子、舞に関する語彙

	語彙	出現頻度	区分	区分別語彙数
1	声	22	謡	謡に関する 語彙数47
2	謡	22	謡	
2	歌声	1	謡	
3	声質	1	謡	
4	ビブラート	1	謡	囃子に関する 語彙数176
5	笛	51	囃子	
6	楽器	33	囃子	
7	鼓	25	囃子	
8	太鼓	23	囃子	
9	囃子	22	囃子	
10	打つ	10	囃子	
11	掛け声	4	囃子	
12	能管	2	囃子	
13	和太鼓	2	囃子	
14	尺八	1	囃子	
15	大鼓	1	囃子	
16	小鼓	1	囃子	
17	小太鼓	1	囃子	舞（含面）に 関する語彙数 176
18	動き	66	舞	
19	舞	53	舞	
20	足音	15	舞	
21	足	12	舞	
22	踊る	10	舞	
23	すり足	6	舞	
24	踊り	2	舞	
25	足踏み	2	舞	
26	踏み鳴らす	1	舞	
27	面	9	舞	音楽の要素に 関する語彙数 150
28	テンポ	29	要素	
29	リズム	24	要素	
30	音程	14	要素	
31	速い	11	要素	
32	緩急	10	要素	
33	強弱	9	要素	
34	間	9	要素	
35	音色	8	要素	
36	大きさ	4	要素	
37	盛り上がり	4	要素	
38	山場	3	要素	
39	メロディー	3	要素	
40	クライマックス	3	要素	
41	速さ	2	要素	
42	強さ	7	要素	
43	弱い	2	要素	
44	声量	2	要素	
45	短調	1	要素	
46	速度	1	要素	
47	拍子	1	要素	
48	静止	1	要素	
49	音量	1	要素	
50	声色	1	要素	

【研究ノート】

5. 考察

批評文の「なか」に表出された語彙の内、提示された語彙 35 (10.1%)、自発的に表出された語彙 310 (89.9%) であった (図 2)。これは鑑賞における感情について、学習者個々が有する語彙(意見交流において獲得した語彙を含む) を用いて表したと考えられる。鑑賞において感受の言語化は、学習者が自発的に表出することができることが明らかになった。

参考文献

- 井関義久(2010)『分析批評で「批評力」が育つ』明治図書、pp.16-17.
- 石原雅子(2022)「国語教育における『批評』に関する研究の成果と課題—批評意識に着目した整理の試みと今後の展望—」『人文科教育研究 49』人文科教育学会、pp.29-48.
- 大内善一(2010)『鑑賞したことを文章に書くこと』の指導にどう対応するか『教育実践学研究』教育実践学会、第 14 号、p.64.
- 大串健吾(2007)「音と感情」『バイオメカニズム学会誌』バイオメカニズム学会、vol.30、No1.
- 大村英史、柴山拓郎、寺澤洋子、星(柴)玲子、川上愛、吹野美和、岡ノ谷一夫、古川聖(2013)「音楽情動研究の動向—歴史・計測・理論の視点から—」『日本音響学会誌』日本音響学会、69 卷 9 号、pp468-469.
- 大村英史、川上愛、柴玲子、柴山拓郎、吹野美和、寺澤洋子、岡ノ谷一夫、古川聖(2010)「音楽における情動理解と活用に向けて」『先端芸術音楽創作学会会報』先端芸術音楽創作学会、Vol.2.No.2、p.8
- 坂井恵(2016)「音楽授業における『知覚と感受』の考え方」『季刊音楽鑑賞教育』音楽鑑賞振興財団、Vol.25、pp.33-35.
- Juslin,P.N.2013「*From Everyday Emotions to Aesthetic Emotions:Towards a Unified Theory of Musical Emotions*」『*Physics of Life Reviews*』10(3)、pp.235-266.
- Scherer.K.R., Zentner.M.R.(2008)「音楽の情動的効果—産出ルール」Juslin,P.N., Sloboda.J.A.編(大串健吾, 星野悦子, 山田真司訳)『音楽と感情の心理学』誠信書房、p.280.
- 西園芳信(2006)「1 カリキュラム構成の原理 生成とは」「2 音楽学習における知覚と感受の対象」『生成を原理とする 21 世紀音楽カリキュラム—幼稚園から高等学校まで—』日本学校音楽教育実践学会、p.12、pp.15-16.

【研究ノート】

- 日本学校音楽教育実践学会(2017)『音楽教育実践学辞典』音楽之友社、pp.20-21.
- 星野悦子(2022)「音楽心理学の研究動向」『音楽教育学 51 (2)』日本音楽教育学会、pp.37-38.
- 星野悦子(2021)「パトリック・N・ジュスリン(著)「日常感情から美的感情まで：音楽的感情の統一理論に向けて (From everyday emotions to aesthetic theory of musical emotions)」『音楽知覚認知研究』日本音楽知覚認知学会、Vol.26.No.2、p.103.
- 松本じゅん子(2009)「音楽の感情的性格の主観的評定における聴取前の気分の影響」『音楽知覚認知研究』日本音楽知覚認知学会、Vol.15.No.1&2、p. 30.
- 源河亭(2017)「音楽は悲しみをもたらすか?—キヴィーの音楽情動について—」『美学』美学会編、68 卷 2 号、p.98、p.106.
- 宮下俊也・岩田真理(2007)「音楽鑑賞における批評の教育的意義とそのアセスメント—高等学校芸術科音楽の授業実践と発話の解釈を通して—」『学校音楽教育研究』日本学校音楽教育実践学会、11 卷、p.181.
- 宮下俊也(2010)「音楽鑑賞学習における批評の構造と思考過程の検討」『学校音楽教育研究』日本学校音楽教育実践学会、14 卷、p.256.
- 向山洋一(1989)『『分析批評』で授業を変える』pp.21-27.
- 文部科学省(2018)『中学校学習指導要領平成 29 年告示解説音楽編』p.32、 p.26、p.29、p.31、 p.10.
- 山下薫子(2016)「知覚と感受の先にあるものを見据えて」『季刊音楽鑑賞教育』音楽鑑賞振興財団 Vol.25、 p.11.
- 山崎正彦(2019)『音楽鑑賞指導入門』スタイルノート、 p.72、p.74、 p.190.

中学生の読書指導に関する現状と課題
—読書調査、学習指導要領、教科書紹介図書の視点から—
**The Current Situation and Issues in Reading Instruction
for Junior High School Students:
From the Perspectives of Reading Surveys, the Course of Study,
and Textbook-Recommended Books**

廣枝 優子

Yuko Hiroeda

キーワード：中学生、読書指導、読書調査、学習指導要領、教科書紹介図書

1. 問題の所在と目的

1.1 中学生段階の読書指導の必要性

2023年に示された「第五次 子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」¹⁾では、「子どもたちの資質・能力を育む上で、読解力や想像力、思考力、表現力等を養う読書活動の推進は不可欠である」と述べられている（文科省 2023a, p.6）。その上で、不読の低減、多様な子どもたちの読書機会の確保、デジタル社会に対応した読書環境の整備、子どもの視点に立った読書活動の推進の4つを基本方針としている（前掲書、pp.7-10）。子どもの読書習慣には、個人差があり、短期間で身に付けられるものではない。乳幼児期から、小学校、中学校、上級学校と段階を経て、読書習慣が身に付き、生涯読書へつながっていくことが理想である。しかし、その中間地点として、バトンをつなぐべき、中学生もまた、不読率の低減に注力しなければならない対象である。小学生に比べ、本の文字や内容の難易度も増し、部活動や行事等、生活も忙しくなることから、この中学生段階は読書離れが進む環境であることは否めない。だからこそ、この時期に読書習慣の差を埋めるべく、読書指導を充実させることが重要になる。

国語教育指導用語辞典では、「読書指導は、読書習慣のない者に読書習慣をつけさせる指導と、既に読書習慣のついている者に対してより高い読書力を身につけさせる指導とに大別される」（田近他 2018, p.120）と示されている。では、全ての子どもたちが読書指導を受けられる場はどこであろうか。前述した計画の推進方策には、「子どもが生涯にわたって

【研究ノート】

読書に親しみ、読書を楽しむ習慣を形成していく上で、学校はかけがえのない大きな役割を担っている」と述べられている（文科省 2023a、p.29）。物理的な読書環境は、自治体によって差があるが、学校であれば、教育課程や授業の中で読書機会を確保し、読書指導を推進することは可能である。この学校での読書指導こそ、不読率低減に向けて欠かすことのできない要素であると考ええる。

1.2 中学生の読書離れ

中学生の読書離れや不読者の増加については、長年の課題とされている。しかし、改善に至る特効薬があるわけではなく、それぞれの学校の国語科担当者や司書教諭、学校司書の取組に頼るしかない現状がある。

このような中、「学校読書調査」²⁾において、2024年の中学生の不読率が23.4%となり、前年から10.3%増加した。過去のデータを見ても、1997年の55.3%から、不読率は減少傾向にあり、2006年の22.7%以降、20%を越えることはなかった（全国学校図書館協議会 2024、p.18）。このように20年以上減少傾向にあった中学生の不読率が、昨年度大きく変化した原因とは、何であろうか。本調査では、学習内容の変化により、図書資料や読書があまり組み込まれなくなったこと、電子書籍の広がりにより紙の本の取組が弱まったこと、学校一斉の読書時間の確保のしづらさから生徒の読書機会が減少していることの3点を挙げている（前掲書、pp.18-19）。これらの中で、電子書籍の広がりや紙の本との関係は、前項で示した基本方針とも共通しており、社会的な現象である。しかし、その他の2点に関しては、学習指導要領や教科書を含め、中学生への読書指導や読書活動について、現状を分析していく必要があると考ええる。

1.3 研究の目的

本研究では、読書調査における中学生の読書の現状、学習指導要領での読書指導の位置付けを整理するとともに、教科書での読書活動や紹介図書の掲載状況について分析し、現在の読書指導の課題について、考察することを目的とする。

2. 中学生の読書状況

2.1 学校読書調査における読書冊数と読書意識

読書調査等で、中学生の不読率が高いと報告されると、単に読書嫌いな生徒が多いという印象を受ける。しかし、本当にそうであろうか。本項では、学校読書調査における平均読書冊数、本を読むことへの意識調査（前掲書、p.17、pp.30-33）から、中学生の読書の

【研究ノート】

現状を整理する（以下、表 1～3 の抜粋、作成は筆者）。

表 1 1 か月間の平均読書冊数

調査年度	2021 年	2022 年	2023 年	2024 年
平均読書冊数	5.3 冊	4.7 冊	5.5 冊	4.1 冊

表 1 は、中学生の 1 か月間の平均読書冊数を経年でまとめたものである。不読率が大幅に増加した 2024 年も、前年より 1.4 冊減少しているものの、例年と大きな変化はない。1 か月を 4 週間と考えると、中学生は 1 週間に 1 冊の本を読んでいることになる。作品によっても異なるが、大人であっても仕事をしながら、週 1 冊読み終わられるのは読書習慣が身に付いている人であろう。6 時間の授業後、部活動、塾等で忙しい中学生の読書時間の確保は、大人同様に難しいと推察できる。無論、平均冊数のため、読書習慣の有無はあるが、読書時間の確保が難しいと言われる中での数値としては、決して低くはない結果であると考えられる。

表 2 本を読むことは好きか

調査年度	2009 年	2024 年
好き・大好き/どちらかと言えば好き	76.1%	73.5%

表 2 では、抽出した年を平均しても、7 割以上の生徒が本を読むことに好印象をもっている。この結果からも、不読率が高いだけで、中学生が一概に読書嫌いとは言えないことが分かる。読書自体は好きな生徒が 7 割存在すると考えると、残りの 3 割への読書意欲の喚起が重要になる。

表 3 本を読むことは大切だと思うか

調査年度	2009 年	2024 年
大切だと思う/どちらかと言えば大切だと思う	88.1%	89.3%

表 3 では、9 割近い生徒が自分にとって読書が大切な行為であると捉えている。これも 15 年前から変わらない中学生の読書への意識である。表 2 の結果から、3 割近い生徒は読書を好きではないことが分かったが、表 3 の数値を見ると、好きではない生徒の 2 割は、大切だと思っていると分析できる。このように考えていくと、「大切だと分かっているけれど読まない」もしくは「読めない」、「読書を大切だと思っていないから読まない」生徒が存在する。この結果からも、これらの生徒へのより系統的で継続的な読書指導が必要になると考える。

では、中学生は、どのような時に本を読みたくなるのであろうか。同調査によると、中

【研究ノート】

学生の男女ともに、「ひまな時間ができたとき」、「読んだ本の続きが知りたいとき」、「人にすすめられたとき」が上位3位を占めている（前掲書、pp.33-36）。不読率の増加という点で考えると、中学生は、読書をするための「ひまな時間」が少ないため、読書ができないという捉え方もできる。実際に、インターネットやSNS等、読書以外に興味のある媒体に時間を費やしていることや授業、部活動、塾で物理的な時間がない等、様々な原因が推察できる。しかし、読書習慣を身に付けることさえできれば、その続きが知りたいからまた読書をするという連鎖も期待できる。この結果からは、読書時間確保の必要性、読書へ誘う読書活動の有効性も見て取れる。

2.2 全校一斉読書活動の現状

朝の読書として、全校で一斉に行う、10分間でも毎朝続ける、読む本は何でもいい、本を読むこと以外何も求めないという4つの特徴（林1999、pp.40-42）を掲げ、実践している中学校も多い。朝の読書推進協議会の調査³⁾によると、2025年5月時点で中学校の実施率は、平均81%である。この数値は、一見高いように見える。しかし、小学校、中学校、高等学校を合わせての結果ではあるが、実施日数は、毎日34.8%、週3、4回15.4%、週1、2回37.6%、期間限定8.4%と学校によって様々である。毎日実施すれば、週50分の読書時間は確保されるが、週1日の場合、10分となる。月にすると、読書時間に大きな差が出ることは否めない。授業時数の確保や教育課程の多様化により、朝の読書の実施時間が減少し、そこで本に触れていた時間がなくなったことが不読率の増加につながっているとも考えられる。全ての子どもたちに一定の読書時間が確保されるという点では、朝の読書の役割は大きい。

3. 学習指導要領における読書指導の位置付け

朝の読書の実施回数が減少しているとすると、中学生が読書をする時間や場は、どこに位置付けられているのであろうか。本章では、中学校学習指導要領の総則編、国語編において、読書指導の位置付けについて整理する。

3.1 学習指導要領総則編における読書指導

平成29年に告示された中学校学習指導要領解説総則編において、「読書は、多くの語彙や多様な表現を通して様々な世界に触れ、これを疑似的に体験したり知識を獲得したりして、新たな考え方に合うことを可能にするものであり、言語能力を向上させる重要な活動の一つである」と明記されている（文科省2018b、p.83）。また、学校図書館においては、

【研究ノート】

読書センター、学習センター、情報センターとしての活用の充実とともに、情報活用能力を学校全体として計画的かつ体系的に指導するよう努めることが望まれるとも示されている（前掲書、p.90）。しかし、生徒が自ら行う10～15分程度の短い読書活動等、指導計画に位置付けることなく行われる活動は、授業時数外の教育活動とされている（前掲書、p.64）。これらの点から考えても、読書は、教育活動全体で言語能力向上の視点で重要視されているが、計画外の読書時間は別の教育活動として扱われていると認識できる。

3.2 国語科学習指導要領における読書指導

現行の中学校学習指導要領解説国語編（以下、「国語科学習指導要領」とする）において、「読書は、国語科で育成を目指す資質・能力をより高める重要な活動の一つである。自ら進んで読書をし、読書を通して人生を豊かにしようとする態度を養うために、国語科の学習が読書活動に結び付くよう発達の段階に応じて系統的に指導することが求められる」と明記されている（文科省 2018c、p.25）。特に、指導にあたっては、「知識及び技能」の「読書」に関する事項との関連を図り、生徒の日常の読書活動に結び付くようにすることも示されている（前掲書、p.71、p.101、p.129）。

これを受け、学習指導要領内の読書の意義と効用において、読書に関する部分について、表4に整理し、各学年で身に付けたり、理解したりと、系統的に指導すべきところに、下線を付す（前掲書、p.26 抜粋、下線は筆者）。

表4 読書の意義と効用

1年	2年	3年
オ 読書が、知識や情報を得たり、自分の考えを広げたりすることに <u>役立つことを理解すること。</u>	エ 本や文章などには、様々な立場や考え方が書かれていることを知り、 <u>自分の考えを広げたり深めたりする読書に生かすこと。</u>	オ 自分の生き方や社会との関わり方を支える <u>読書の意義と効用について理解すること。</u>

表4の1年、読書が「役立つことを理解すること」に関しては、前述した学校読書調査における読書の大切さを認識している数値から見ても、到達している生徒は多いであろう。しかし、2年の「自分の考えを広げたり深めたりする読書に生かすこと」や、3年の「読書の意義や効用について理解すること」は、読書習慣が身に付いていない生徒が到達することは、難しいのではないかと考える。逆に、3年でこの段階まで求めるのであれば、読書という柱での系統性だけでなく、継続的な指導がなされるべきである。また、国語科学習指導要領の中で、「読書指導」という言葉は、「読書指導の改善・充実」という見出し（前

【研究ノート】

掲書、p.10) と、読書センターについて、「生徒の読書活動や生徒への読書指導の場である」(前掲書、p.140) の2回しか使われていない。

足立は、学習指導要領における読書の不安定な位置付けについて次のように述べ、そのための指導法の積極的な開発の必要性を指摘している(足立 2025、p.22)。

学習指導要領の目標にあっても内容に指導事項がなければ、指導しなくてよいことになってしまう。指導事項や言語活動例があっても指導法がなければ、どのように指導したらよいのか分からない。習慣や態度はそれを目指して学習指導が行われるべきであるが、学校や授業といった単位では扱いにくいことである。

読書指導は、生徒に読書習慣を身に付けたり、読書に興味をもてるような読書活動を計画・実施したりし、系統的・継続的に指導することが必要であるとする。国語科として、包括的に読書を扱っているが故に、生徒の自主性に任せた読書指導に留まっているのであれば、3年間の目標とするところまで身に付かない。短時間や定期的な実施であっても、国語科や教育活動の中に読書指導として別のカリキュラムを位置付ける必要があるとする。

4. 教科書における読書活動と紹介図書の分析

国語科学習指導要領を受け、実際に中学生が使用している教科書には、読書活動や教材以外に読書の幅を広げるために、紹介された図書(以下「紹介図書」とする)が掲載されている。本章では、中学校国語検定教科書、4社3学年12冊⁴⁾を対象に、読書活動、紹介図書の掲載状況について分析する。

4.1 各学年における読書活動

読書指導に関する記載の仕方や場所は、教科書会社によって異なる。4社の教科書において、読書や読書活動として項目を立て、掲載しているものに関して抽出し、学年ごとにまとめ、表5に示す(抜粋、下線は筆者)。

表5 各学年の読書活動

1年	2年	3年
本の帯、ポップ、本や一文紹介、 <u>読書会</u> 、 <u>読書記録</u> 、お試し読書、作品一部紹介、他者の読書体験	ポスター、ブックリスト、 <u>ブックトーク</u> 、 <u>ビブリオバトル</u> 、 <u>翻訳作品比較</u> 、他者の読書体験	ブックレビュー、 <u>ブックトーク</u> 、 <u>ビブリオバトル</u> 、 <u>読書会</u> 、 <u>読書記録</u> 、読書生活振り返り、本との付き合い方や紹介、他者の読書体験

【研究ノート】

この結果から、各学年で読書を促す作品や、様々な読書活動が教科書に組み込まれていることが分かる。中には、読書を単元のように位置付けているものや、資料編として1ヶ所にまとめて学べるようになっているものもある。しかし、下線にある読書会や読書記録、ブックトーク、ビブリオバトルのように、教科書会社によって、取り扱う学年が異なることを考えると、読書活動自体の系統性や継続性は見られない。各教科書会社の中では、3年間で計画的に作成されているが、読書指導における大本となる基準やカリキュラムが存在していないために、このように統一が図れていないのではないかと考える。

4.2 紹介図書の掲載状況

本項では、中学生が教科書からどれくらいの図書に出合っているかを調査した。対象は、前項で扱った教科書4社の紹介図書の中で、書名、著者、出版社とともに、本の表紙写真が掲載されているものとした。表紙写真の掲載は、文字だけのものとは異なり、教科書を使用する際に、その場で生徒の視覚に入り、興味・関心と直結する。これは、読書習慣の有無に関係なく、全生徒が平等に紹介図書に出合えるという点で、教科書が提供する読書環境としては有意義であると考えた。(表6の紹介図書抽出は、筆者)

表6 紹介図書平均冊数

学年	1年	2年	3年
紹介図書	101冊	99冊	96冊

この結果から、各学年ともに、教材文以外にも100冊近い作品が紹介図書として、掲載されていることが分かる。生徒は中学校3年間で、教科書内だけで約300冊の紹介図書に出合うことができている。分野ごとにまとめられていたり、生徒が興味・関心を示すような見出しがつけられていたり、各教科書会社ともに工夫がなされている。生徒は手持ちの教科書から、読みたいと思えば、いくらでも作品名を知ることができる環境があると言える。その上、読書意欲のある生徒に向けては、デジタルコンテンツ内に、さらに多くの紹介図書が掲載されている。これらの点からも教科書における生徒への読書啓発や、本との出合いの場は十分に提供されていると捉えられる。このような現状の次段階は、これらの紹介図書を授業の中で、有効活用しているかどうかである。近年の不読率を考えると、この出合いの場を生かしきれていないのではないかと推察するしかない。

【研究ノート】

5. 本研究のまとめと読書指導における課題

5.1 本研究のまとめ

1) 読書調査における中学生の読書状況

学校読書調査から、中学生の不読率が前年度と比べ、10%以上増加している現状はあるものの、平均読書冊数は、月4冊と大きな変化はない。また読書に対し、好意的な傾向は変わらず7割あり、さらに、9割近い生徒が読書の重要性を感じていることも例年と差はない。この現状から中学生は読書が嫌いで、必要がないから読んでいないという見解は異なると考えられる。しかし、不読率の増加は大きな課題である。朝読書時間の減少や日々の忙しさにより、学校や家庭で本を開く時間自体がなくなっていることが推察され、心理的な読書離れというより、物理的な問題であることが考えられる。ゆえに、読書時間、本との出会いの場の設定、読書活動の充実が今後の読書指導改善の視点になると考える。

2) 読書状況と学習指導要領との関係

現行の学習指導要領における読書の位置付けについては、総則において、読書に関わる具体的な記載がないことから、国語科が要となり、指導している現状がある。国語科学習指導要領における各学年の指導内容に対して、教師側が見取る基準が曖昧で、生徒の個人的な読書習慣や読書力に頼った判断しかできず、またそれを評価する場や仕組みも構築されていないと考える。教育活動や授業で、子どもたちに指導をせず、読書習慣を身に付けさせることは不可能である。特に不読者と呼ばれる層に何も手立てを施さず、数値のみを低減させることなど、教育の視点からはありえないであろう。不読者の低減を求めるのであれば、読書指導においても系統的、継続的に行う時間とカリキュラムが必要である。国語科の他の指導事項と包括して、読書指導を行うことは時間的にも難しい点が見受けられる。これにより、中学校3年間で読書習慣の差が開き、読書力が向上する生徒と、全く本に触れる時間をもたない生徒の二極化が進んでいると考える。

3) 教科書における読書活動と紹介図書

現在の国語科教科書は、学習指導要領に基づき、読書活動も各社工夫がされている。しかし、教科書会社によって読書活動を組み込む学年が異なっており、系統性はない。紹介図書に関しては、各社とも学年100冊近い本が教材とは別に、表紙写真とともに掲載されており、生徒の興味・関心を引くものであった。読書が好きであったり、読書習慣が身に付いていたりする生徒に対しての案内としては充分である。

そこで、この紹介図書をどれだけ授業で活用するかが次段階の課題である。不読傾向に

【研究ノート】

ある生徒には、それらの本を手にとらせる工夫が必要である。時間がない中学生段階だからこそ、学校の教育活動や教育課程の中で、少しでも読書をする時間を設定することが読書指導の第1歩になるのではないかと考える。

5.2 読書指導充実への課題

読書調査、学習指導要領、教科書を対象に、中学生の読書の現状を考察した中で、次の3点を今後の課題として挙げる。

1) 読書指導・読書時間の系統的・継続的な位置付け

読書調査の結果からも、中学生は読書を大切なものと認識しており、時間があれば読むことに抵抗を示していない生徒も多い。その上、学習指導要領でも系統的な読書活動が求められ、教科書も読書へ誘うたくさんの紹介図書を掲載している。これらの図書を読書指導の教材として扱っていないのは、読書活動、読書指導をカリキュラムとして、明確に位置付けていないからだと考える。小・中学校の国語教育や教育課程内に、読書指導の場と読書時間が位置付けられ、発達段階に応じた教育が行われれば、義務教育終了後には、読書習慣が身に付いた読者を生涯読書へつなげることができるのではないかと考える。

2) 不読者への意欲向上の手立て

生徒の中には、小学校6年間で読書習慣が身に付いている者も存在する。しかし、そうではない不読傾向の生徒にこそ、系統的・継続的な読書指導が必要なのである。読書は、読み書きが苦手な生徒にとっては、1冊を読むのにも苦痛が生じる。それは、読書習慣がないまま、中学生になって、長編を読むなどの経験を強えられるからである。小学校低学年から発達段階に応じた文字数や内容の読書を、スローステップで行うことで抵抗感は少なくなり、読書習慣が身に付くと考える。さらに読後に、考えたことや疑問点等を人と交流し合う場を意識的に設け、インプットしたことをアウトプットし、人と本について話すという読書活動を位置付けていくことで、読書後の楽しみを見出し、それが次の読書意欲へつながる。読書習慣が身に付いていない、読書を苦手とする生徒へこそ、手立ての工夫が必要であると考え。

3) 教科書教材、紹介図書の活用

学習指導要領を見ても、中学校3年間で学ばねばならないことは山積している。国語科においても、読書だけに時間を割けるわけでもなく、教師は日々の教材研究にも忙しい。今回の教科書分析で、各社デジタルコンテンツを含め、読書活動、紹介図書等、十分な資料が掲載されていることが分かった。各学年、これらの教材や紹介図書を活用し、月1時

【研究ノート】

間、もしくは週 10 分でも読書指導を行えば、年間では十分な時間となる。系統的・継続的に位置付け、いつでも本に触れる仕かけをしていくことで、読書習慣が身に付いていくのではないかと考える。まずは、生徒の日常に読書を組み入れていくことが必要である。

注

- 1) 本計画は、子どもの読書活動の推進に関する法律に基づき、令和 5 年 3 月に閣議決定され、政府がおおむね 5 年ごとに策定している。
- 2) 全国学校図書館協議会により、全国小・中・高等学校の児童生徒の読書状況について毎年行われる調査である。第 69 回（2024）の中学生は、抽出された 3,496 人を対象に調査した結果が報告されている。
- 3) 朝の読書推進協議会が、朝の読書の全国都道府県別実施校数を調査した報告である。
- 4) 教育出版『伝え合う言葉 中学国語 1.2.3』、三省堂『現代の国語 1.2.3』、東京書籍『新編 新しい国語 1.2.3』、光村図書『国語 1.2.3』、4 社 3 学年計 12 冊（令和 7 年発行）

引用・参考文献

朝の読書推進協議会（2025）『朝の読書』全国都道府県別実施校数

https://www.tohan.jp/wp/wp-content/themes/tohan/pdf/asadoku_school.pdf

（2025 年 11 月 27 日閲覧）

足立幸子（2025）『国際学力調査に基づく読書指導法の開発研究』風間書房

猪原敬介（2024）『読書効果の科学 ―読書の“穏やかな“力を活かす 3 原則』京都大学
学術出版会

全国学校図書館協議会（2024）『学校図書館 11（2024 年 11 月号／第 889 号）』

田近洵一、井上尚美、中村和弘編（2018）『国語教育指導用語辞典第五版』教育出版

日本読書学会（2019）『読書教育の未来』ひつじ書房

林公（1999）『心を育てる「朝の読書」』教育開発研究所

文部科学省（2023a）「第五次 子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」

https://www.mext.go.jp/content/20230327mxt-chisui01-100316_01.pdf

（2025 年 11 月 27 日閲覧）

文部科学省（2018b）『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総則編』東山書房

文部科学省（2018c）『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 国語編』東洋館

執筆者一覧

内田 有一 (教授/音楽教育学)

廣枝 優子 (准教授/教育学)

(掲載順)

研究紀要編集委員会

内田 有一 * 廣枝 優子

倉地 恵子 三宅 康弘 (事務)

(*は委員長)

編集後記

この「上野学園短期大学研究紀要」の編集に当たっては、原則的に次の方針に従いました。

・「研究論文」は10 ページ以上 15 ページ以内、「研究ノート」は10 ページ以内、「実践報告」は8 ページ以内。「研究論文」「研究ノート」「実践報告」の順に収録しています。

・使用言語は日本語または英語としました。

・表記法については、おおよその概略はマニュアルによって統一しましたが、細部によっては執筆者の判断に委ねております。

(研究紀要編集委員会)

上野学園短期大学研究紀要 第4号

編 集 研究紀要編集委員会

発行日 2026年2月28日

発行者 学校法人 上野学園

台東区東上野 4-24-12
